

「咳嗽と喀血を呈した猫の気管支疾患の1例」-会場での討論

Q1：小動物、特に猫では喀血を見ることは少ないが、犬では腫瘍性疾患に伴うことを多く経験している。この症例以外に猫で喀血症例を経験しているか？

A1：猫で喀血を認めることは非常に稀で、演者は本症例以外に経験しておりません。

共同演者（城下）より：猫の気管支拡張症で喀血を呈した1例を経験しております。その症例では病変気管支を含む肺葉切除にて病理診断でき、高度リンパ球浸潤を伴った組織破壊が生じていたのでステロイド投与にて喀血はコントロールできました。この症例は2004年の日本獣医学会にて症例報告いたしました（城下幸仁，金井孝夫．中枢気道壁が組織崩壊し嚢胞状拡張を伴い喀血を呈した猫の1例．日本獣医学会学術集会講演要旨集 2004;138回:158.）。また犬では、肺水腫などを除けば、大量の鮮血喀血を呈した肺血管肉腫を1例経験しました。この症例は残念ながら転帰不良であったため死後剖検にて確認しました。

Q2：猫の気管支疾患で肺野浸潤影が認められることは稀に思うがこの症例ではどのように考えているのか？また、肺の超音波検査は実施していたのかどうか？

A2：本症例は拍動性気管支結節病変からの出血が肺胞に流入し浸潤影を生じたと考えています。猫の気管支疾患の治療で浸潤影も消失しています。肺の超音波検査は実施しておりません。

（城下より補足：猫の気管支疾患/喘息では、右中肺野の無気肺像は比較的良好にみとめられます。これは肺門側の小さい楔形状の陰影を示します。以下成書でも記載があります。

Bay JD, Johnson LR. Feline Bronchial Diseases/Asthma In: King LG, ed. *Textbook of Respiratory Diseases in Dogs and Cats*. St. Louis: SAUNDERS, 2004;388-396. これは過膨張によって右肺中葉が周囲より圧迫を受けて生じるものと推察されます。しかし、本症例で認められた右中肺野の浸潤影は胸壁にまで達し、猫の気管支肺疾患/猫喘息で認められる通常の無気肺像とは異なるように思えますので病的要因があると思われま

Q3：心拍数の著明な増加、APTT 延長が認められ、肥大型心筋症はなかったのか？

A3：心拍数増加は猫が非協力的であり診察時に非常に興奮していたことが原因であると考えております。当院で実施可能な心臓超音波検査にて肥大型心筋症は否定しております。

Q4：咳嗽、X線所見から肺の寄生虫症も考えられるが？

A4：当院ではこれまで肺の寄生虫症を診断した経験がありません。本症例ではBALFの鏡検のみでの除外しか実施できておりません。今後、肺の寄生虫症の除外、診断の必要性はあり検討が必要です。ぜひ肺の寄生虫症の症例をご経験した先生のご意見を伺いたいです。

質問者からの解答：肺の寄生虫症であればステロイド剤に短期間は反応しますが、しばらくすると再発してきますので、本症例では猫の気管支疾患の最終診断を支持します。BALFに

も糞便検査でも検出できず、駆虫薬にのみ反応する症例の経験があります。